中国の

奈良県・中国ゆかりの地紹介

第六弾 薬師寺

今年は、奈良県と中国陝西省が2011年に友好提携を締結して10周年を迎える記念の年です。 これを記念して、奈良県内にある奈良と中国とのゆかりの地、特に陝西省とのゆかりを中心にご紹介 しています。第六弾となる今回は、奈良市西ノ京にある薬師寺をご紹介します!

世界文化遺産である薬師寺は、日本における現存最古の宗派である法相宗の大本山の一つで、南側の「哲学院が発生」と北側の「玄奘三蔵院伽藍」から構成されています。国宝の東塔などがある南側の「白鳳伽藍」が一般的には有名ですが、今回は北側の「玄奘三蔵院伽藍」を紹介したいと思います。

「玄奘三蔵院伽藍」は、日本でも有名な「西遊記」に登場する三蔵法師のモデルとしても広く知られている玄奘三蔵(602~664年)にゆかりのある場所です。

元々、法相宗は玄奘三蔵の弟子である唐の慈恩大師(632~682年)が開いた宗派で、653年に入唐し、玄奘三蔵に師事した道昭 (629~700年)をはじめ、唐で学んだ僧により日本にもたらされました。玄奘三蔵は17年にも及ぶインド・ナーランダ寺院への求法※の旅を経て、多くの経典を唐の都・長安に持ち帰りました。薬師寺では、玄奘三蔵の遺徳を後世に伝えるべく、1991年に「玄奘三蔵院伽藍」が建立され、その中央にある玄奘塔には、玄奘三蔵のご遺骨が納められ、玄奘三蔵訳経像が祀られています。

※仏の教えや悟りの道を求めること。



大雁塔のそばに立つ玄奘三蔵像 写真提供:中国駐大阪観光代表処

また、玄奘塔の北側にある大曽西域壁画殿には、平山郁夫画伯が約20年をかけて、約4000枚のスケッチを基に創作した「大唐西域壁画」の世界が広がっています。そこには、7場面13壁面、全長49mの壁面に、玄奘三蔵の旅の出発地である長安から目的地のナーランダまでの風景が描かれています。中には、玄奘三蔵がナーランダから持ち帰った経典の翻訳を行った慈恩寺(陝西省西安市)の大権塔も描かれており、まさか奈良で母国の大雁塔の絵を見ることができるとは思っていなかったため、驚いたのと同時に、奈良と陝西省のつながりを強く感じました。

(奈良県国際交流員 呉春蘭)



玄奘塔 写真提供:薬師寺



大唐西域壁画 平山郁夫筆 写真提供:薬師寺